芥川龍之介全集

第七卷

芥川龍之介全集 第七巻　第七回配本（全十二巻）

一九七八年二月二十二日　發行©

定價三二〇〇圓

著者　芥川龍之介

發行者　岩波雄二郎

發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁五五
株式會社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

芥川龍之介全集

第七巻

目次

或戀愛小説　三
文放古　一二
リチャード・バアトン譯
「一千一夜物語」に就いて　一九
「假面」の人々　二七
案頭の書　二九
新緑の庭　三六
春の日のさした往來を
ぶらぶら一人歩いてゐる　三八
久保田万太郎氏　四〇

寄　席　四三
桃太郎　四八
鷺と鴛鴦　五七
「續晉明集」讀後　六〇
蒐　書　六四
格さんと食慾　六六
十圓札　六八
長江游記　八三
輕井澤日記　九六
文藝一般論　九九
文藝鑑賞講座　一二四
明日の道德　一四〇
「高麗の花」讀後　一五七
僞者二題　一六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裝幀に就いての私の意見　一六四
プロレタリア文學論　一六五
「春の外套」の序　一六九
娼婦美と冒險　一七一
大導寺信輔の半生　一七三
早　春　一九三
馬の脚　一九九
澄江堂雜記　二一八
　續「とても」　丈艸の事
德川末期の文藝　二二一
俊　寛　二二三
出來上つた人　二二五
壯烈の犧牲　二二七
現代十作家の生活振り　二二九

學校友だち　二三五
正直に書くことの困難　二四〇
思つてゐるありの儘を　二四二
田端人　二四四
文部省の假名遣改定案について　二四七
日本小說の支那譯　二五三
望むこと二つ　二五六
春　二五八
念仁波念遠入禮帖　二七五
日本の女　二七七
平田先生の飜譯　二八九
人及び藝術家としての薄田泣菫氏　二九二
雪　二九七
詩集　二九九

ピアノ　三〇一
鏡花全集目録開口　三〇四
鏡花全集の特色　三〇七
鏡花全集に就いて　三〇九
北京日記抄　三一三
雑信一束　三二六
澄江堂雑詠　三三二
温泉だより　三三五
わが俳諧修業　三四五
「わたくし」小説に就いて　三四七
結婚難並びに戀愛難　三四九
「未翁南甫句集」の序　三五三
「若冠」の後に　三五五
「太虚集」讀後　三五七

Gaity 座の「サロメ」　三六一
變遷その他　三六八
微　笑　三七三
ポーの片影　三七六
藤澤清造君に答ふ　三八一
侏儒の言葉　三八三
後　記　四五七

小説 隨筆 七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

或戀愛小説

――或は「戀愛は至上なり」――

或婦人雜誌社の面會室。

主筆　でつぷり肥つた四十前後の紳士。

堀川保吉　主筆の肥つてゐるだけに痩せた上にも痩せて見える三十前後の、――ちよつと一口には形容出來ない。が、兎に角紳士と呼ぶのに躊躇することだけは事實である。

主筆　今度は一つうちの雜誌に小説を書いては頂けないでせうか？　どうもこの頃は讀者も高級になつてゐますし、在來の戀愛小説には滿足しないやうになつてゐますから、……もつと深い人間性に根ざした、眞面目な戀愛小説を書いて頂きたいのです。

保吉　それは書きますよ。實はこの頃婦人雜誌に書きたいと思つてゐる小説があるのです。

主筆　さうですか？　それは結構です。もし書いて頂ければ、大いに新聞に廣告しますよ。「堀川氏

の筆に成れる、哀婉極りなき戀愛小說」とか何とか廣告しますよ。

保吉　「哀婉極りなき」？　しかし僕の小說は「戀愛は至上なり」と云ふのですよ。

主筆　すると戀愛の讃美ですね。それは愈結構です。厨川博士の「近代戀愛論」以來、一般に青年男女の心は戀愛至上主義に傾いてゐますから。……勿論近代的戀愛でせうね？

保吉　さあ、それは疑問ですね。近代的懷疑とか、近代的盜賊とか、近代的白髮染めとか——さう云ふものは確かに存在するでせう。しかしどうも戀愛だけはイザナギイザナミの昔以來餘り變らないやうに思ひますが。

主筆　それは理論の上だけですよ。たとへば三角關係などは近代的戀愛の一例ですからね。少くとも日本の現狀では。

保吉　ああ、三角關係ですか？　それは僕の小說にも三角關係は出て來るのです。……ざつと筋を話して見ませうか？

主筆　さうして頂ければ好都合です。

保吉　女主人公は若い奧さんなのです。外交官の夫人なのです。勿論東京の山の手の邸宅に住んでゐるのですね。背のすらりとした、ものごしの優しい、いつも髮は——一體讀者の要求するのはどう云ふ髮に結つた女主人公ですか？

主筆　耳隱しでせう。

保吉　ぢや耳隱しにしませう。いつも髪を耳隱しに結つた、色の白い、目の冴え冴えしたちよつと脣に癖のある、――まあ活動寫眞にすれば栗島澄子の役所なのです。夫の外交官も新時代の法學士ですから、新派悲劇じみたわからずやぢやありません。學生時代にはベエスボールの選手だつた、その上道樂に小説位は見る、色の淺黑い好男子なのです。新婚の二人は幸福に山の手の邸宅に暮してゐる。一しよに音樂會へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。……

主筆　勿論震災前でせうね？

保吉　ええ、震災のずつと前です。……一しよに音樂會へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。或は又西洋間の電燈の下に無言の微笑ばかり交はすこともある。女主人公はこの西洋間を「わたしたちの巢」と名づけてゐる。壁にはルノアルやセザンヌの複製などもかかつてゐる。ピアノも黑い胴を光らせてゐる。鉢植ゑの椰子も葉を垂らしてゐる。――と云ふと多少氣が利いてゐますが、家賃は案外安いのですよ。

主筆　さう云ふ説明は入らないでせう。少くとも小説の本文には。

保吉　いや、必要ですよ。若い外交官の月給などは高の知れたものですからね。

主筆　ぢや華族の息子におしなさい。尤も華族ならば伯爵か子爵ですね。どう云ふものか公爵や侯爵は餘り小説には出て來ないやうです。

保吉　それは伯爵の息子でもかまひません。兎に角西洋間さへあれば好いのです。その西洋間か、銀

座通りか、音樂會かを第一回にするのですから。……しかし妙子は――これは女主人公の名前ですよ。――音樂家の達雄と懇意になつた以後、次第に或不安を感じ出すのです。達雄は妙子を愛してゐる、――さう女主人公は直覺するのですね。のみならずこの不安は一日ましにだんだん高まるばかりなのです。

主筆　達雄はどう云ふ男なのですか？

保吉　達雄は音樂の天才です。ロオランの書いたジヤン・クリストフとワッセルマンの書いたダニエル・ノオトハフトとを一丸にしたやうな天才です。が、まだ貧乏だつたり何かする爲に誰にも認められてゐないのですがね。これは僕の友人の音樂家をモデルにするつもりです。尤も僕の友人は美男ですが、達雄は美男ぢやありません。顏は一見ゴリラに似た、東北生れの野蠻人なのです。しかし目だけは天才らしい閃きを持つてゐるのですよ。彼の目は一塊の炭火のやうに不斷の熱を孕んでゐる。――さう云ふ目をしてゐるのですよ。

主筆　天才はきつと受けませう。

保吉　しかし妙子は外交官の夫に不足のある譯ではないのです。いや、寧ろ前よりも熱烈に夫を愛してゐるのです。夫も亦妙子を信じてゐる。これは云ふ迄もないことでせう。その爲に妙子の苦しみは一層つのるばかりなのです。

主筆　つまりわたしの近代的と云ふのはさう云ふ戀愛のことですよ。

保吉　達雄は又毎日電燈さへつけば、必ず西洋間へ顔を出すのです。それも夫のゐる時ならばまだしも苦勞はないのですが、妙子のひとり留守をしてゐる時にもやはり顔を出すのでせう。妙子はやむを得ずさう云ふ時にはピアノばかり彈かせるのです。尤も夫のゐる時でも、達雄は大抵ピアノの前へ坐らないことはないのですが。

主筆　そのうちに戀愛に陷るのですか？

保吉　いや、容易に陷らないのです。しかし或二月の晩、達雄は急にシュウベルトの「シルヴィアに寄する歌」を彈きはじめるのです。あの流れる炎のやうに情熱の籠つた歌ですね。妙子は大きい椰子の葉の下にぢつと耳を傾けてゐる。そのうちにだんだん達雄に對する彼女の愛を感じはじめる。同時に又目の前へ浮かび上つた金色の誘惑を感じはじめる。もう五分、――いや、もう一分たちさへすれば、妙子は達雄の腕の中へ體を投げてゐたかも知れません。其處へ――丁度その曲の終りかかつた處へ幸ひ主人が歸つて來るのです。

主筆　それから？

保吉　それから一週間ばかりたつた後、妙子はとうとう苦しさに堪へ兼ね、自殺をしようと決心するのです。が、丁度妊娠してゐる爲に、それを斷行する勇氣がありません。そこで達雄に愛されてゐることをすつかり夫に打ち明けるのです。尤も夫を苦しめないやうに、彼女も達雄を愛してゐることだけは告白せずにしまふのですが。

主筆　それから決闘にでもなるのですか？

保吉　いや、唯夫は達雄の來た時に冷かに訪問を謝絶するのです。達雄は默然と脣を嚙んだまま、ピアノばかり見つめてゐる。妙子は戸の外に佇んだなりぢつと忍び泣きをこらへてゐる。――その後二月とたたないうちに、突然官命を受けた夫は支那の漢口の領事館へ赴任することになるのです。

主筆　妙子も一しよに行くのですか？

保吉　勿論一しよに行くのです。しかし妙子は立つ前に達雄へ手紙をやるのです。「あなたの心には同情する。が、わたしにはどうすることも出來ない。お互に運命だとあきらめませう。」――大體さう云ふ意味ですがね。それ以來妙子は今日までずつと達雄に會はないのです。

主筆　ぢや小説はそれぎりですね。

保吉　いや、もう少し殘つてゐるのです。妙子は漢口へ行つた後も、時時達雄を思ひ出すのですね。のみならずしまひには夫よりも實は達雄を愛してゐたと考へるやうになるのですね。好いですか？　妙子を圍んでゐるのは寂しい漢口の風景ですよ。あの唐の崔顥の詩に「晴川歷歷漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲」と歌はれたことのある風景ですよ。妙子はとうとうもう一度、――一年ばかりたつた後ですが、――達雄へ手紙をやるのです。「わたしはあなたを愛してゐた。今でもあなたを愛してゐる。どうか自ら欺いてゐたわたしを可哀さうに思つて下さい。」――さう云ふ意味の手紙をやるのです。その手紙を受けとつた達雄は……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com